

未紹介の大町桂月の遺稿

小口雅史

今年の七月のある日、弘前大学人文学部での国史学の集中講義を終えられた山中裕先生（本号所収の研究随想参照）らと共に、私は上北郡十和田湖町の葛温泉を訪れた。この、十和田湖・奥入瀬溪流の美を世に広めた明治・大正の文筆家大町桂月ゆかりの宿で、私たちは、御主人の小笠原耕四郎氏より、「堅雪の八幡嶽」と題された桂月の未発表の遺稿十三枚の原稿用紙（二百字詰）が張り付けられた縦約一メートル、横約二メートルの二つ折りの屏風を拝見させていただいた。その存在についてはかつて東奥日報紙上で報道されていたものの、内容全文については未発表の貴重なものである。特に壺の石碑についての記述には興味深いものがあり、是非とも青森県の研究者をはじめ多くの人々に内容をお伝えしたいと思い、そのことをお話ししたところ、小笠原氏には快く紹介を許可していただいたので、この場をお借りして六十数年ぶりに目の目を見る桂月の遺稿を全文掲載することとした。なお紙幅の都合もあり、伝来の経緯や内容その他の詳しい考証については、来年三月に刊行予定の関東学院大学の紀要（山中裕先生の退職記念号）所収の拙稿に譲ることとする。

堅雪の八幡嶽

大町桂月

南無薬師瑠璃光如来みちのくの

葛の出湯にはにおはしませ

これ小杉未醒畫伯の作なり。さても畫伯は多能なる哉。洋畫の大家なるに、東洋趣味を解して、一種の南畫を作る。文に長ず。歌を善くす。今や薬師の銅佛を作れり。

本尊既に奇技なり。之を安置する薬師堂は、葛温泉の主人が個人の力を以て數千円を投じて作れる所に係る。これ今の世の珍なり。其建築に用ゐたる材木餘れり。これにて庵を結ばずやとて、小庵成れり。薬師堂の餘材より成りたるものなれば、餘材庵と名づく。材は悉く桂なり。而して庵は瓢箪沼に臨めり。その材の桂、余と因縁なしとせず。地にも瓢箪ありて、放牧の馬来り飲む。座にも瓢箪ありて、日夕余の側に待す。人里を離れたる十和田の山中、おとづるゝものは、唯白雲のみなり。蚊居らざれば、蚊帳を用ゐず。盜難なければ、雨戸を鎖さず。風吹けども、飛ぶ塵は無し。山高くして、紫外線直射す。満目山毛櫨の森林にて、幽禽仙樂を奏す。瓢箪沼の外、附近に葛沼あり。鏡池あり。月沼あり。長沼あり。菅沼あり。一里ばかり離れて、赤沼あり。なほ四里下れば十和田湖あり。四里上れば八甲田山あり。餘材庵に取りては、大なる自然の庭園なり。

極樂へ越ゆる峠の一と休み

葛の出湯に身をば清めて

我齡六十歳に垂んとして旦夕を圖られず、地獄に落つるかも知れざる

が、先づ極樂往生と自ら定めて安心するなり。我れ此庵にありて、書を讀み、文を作り、酒を飲み、靈泉に浴し、出で、馬と共に逍遙す。

雪とくるまではこもらむ山の中

餌を取る役は熊に任せて

一年の半は五六尺の積雪に埋れ、五月に入りて積雪解く。その解くる前、四月に入りて、積雪は堅雪となる。堅雪とならぬ前とても爪子といふものを穿き、カンジキといふものを結びつくれば、積雪の上を歩かざるに非ず。されど勞多ければ、冬の間は、まづ〱箆城して、一陽來復を待つなり。

堅雪なる哉、〱。堅雪となりて、山は始めて歩くべし。その堅雪、温泉附近は五六尺なるも、登るに従つて一丈となり、二丈となり、三丈となり、唯喬木を餘して、灌木を埋め、荆棘を埋め、篠竹を埋め、川を埋め、谷を埋め、山の傾斜を緩にす。堅雪なれば、爪子を要せず、カンジキを要せず。足は雪に没入せず、又迂りもせず。峯より峯へ、谷より谷へ、縦走横断自由自在なり。殊に傾斜面を一呼して下る快さは、富士の砂走りなどの比に非ず。近年スキーは流行しかけたるが、天下の旅行家、未だ堅雪の山登りを知らぬやうなり。

年頃、冬は葛温泉に箆城し、堅雪を待ちて、十和田、八甲田の峯々を踏破したるが、今年はやをかねて、八幡嶽に登れり。朝早く葛温泉を発し、一里登りて葛川を渡り、谷地温泉を雪の下に臨み、近く左に高田大嶽を仰ぎ、その奥に八甲田大嶽を仰ぎ、黒森山を右に見て、八幡嶽の頂にとりつけば、日將に暮れむとす。源氏の榮えし處、八幡宮あらざる無し。こゝは甲斐源氏の一族なる南部氏の旧領土なりければ、奥州の奥、

珍しくも八幡宮あるなり。而して三千尺の山の上に八幡宮あるは、天下唯この八幡嶽のみなり。

一呼して七戸に下れば、瑞龍寺の住持、飯坂円收師喜び迎ふ。師は葛の薬師如來を開眼したる僧なり。我一寺のみの客に非ず、七戸の客なりとて、重立ちたる人々と共に、歡迎の會を開けり。七戸に下りたるは、円收師の教を受けたきことあればなり。今一つ壺の石碑の跡を探りたければなり。七戸より青森さして、一里半ばかり北すれば、坪といふ村あり。今や石碑は跡方もなければ、昔有名なりし壺の石碑のありたる處は、こゝなりと云ひ傳ふ。源頼朝の歌に、

みちのくのいはで志のぶはえぞ知らぬ

書き盡してよ壺の石ぶみ

後鳥羽上皇この歌を勅選の新古今和歌集に採り給へり。上の句に、漢字を宛てはむれば、

陸奥の岩手信夫は蝦夷知らぬ

となるなり。なほ歌意によりて、漢字を宛てはむれば、

陸奥の言はで忍ぶはえぞ知らぬ

となるなり、陸奥、岩手、信夫、蝦夷、壺、すべて地名なり。平清盛は、僧徒を敵として佛教に迫害を加へたるが、頼朝は佛教を優待したり。この際、僧徒を代表して、頼朝と交渉したるは、慈圓大僧正なり。或時慈圓は頼朝に手紙を出して、『筆にては盡されず、直接拜芝の上、御相談致したし』と云ひければ、頼朝この歌を作りて、慈圓に送りけるなり。歌の意は、『筆にては盡されずとて、言はずして、唯忍んでばかり居られては、何の事やら、さっぱり分らず、どうぞ精しく書きてよこして下

「され」といふことなり。五つまでも地名を疊み込みたる手腕非凡なりといふべし。西行法師も

みちのくの奥ゆかしくぞおもほゆる

壺の石ぶみ外の濱風

といふ歌を作れり。外ヶ濱とは、青森灣より津軽海峡へかけたる東津軽郡と北津軽郡との海岸を云ふなり。この西行の歌にて判じても、壺の石碑と外ヶ濱とは、陸奥の最奥みちのくにありしことが知らるゝなり。而して鎌倉時代には、壺の石碑なほ存したりしことも知らるゝなり。仙臺より塩釜へゆく途中に、多賀城碑あり。これが壺の石碑なりと言ひふらしたるものなるが、實は偽物なり。仙臺の佐久間洞巖といふ学者、自ら文を作り、自から書して石に刻して、田の中に埋めおきて、數年を経て、水戸義公に壺の石碑の話を持ちかけたり。義公仙臺侯に問ふ。仙臺侯洞巖をして探らしむ。洞巖探る真似して、先年埋めたる石碑を掘り出して、之を壺の石碑と称して、義公を欺けり。仙臺侯を欺けり。天下後世を欺けり。然るに中村不折畫伯、先年その偽物なるを看破して、天下に発表せり。折角の化けの皮を剥がれて、洞巖地下に苦笑するなるべし。

以上、とりあえずその全文を紹介させていただいて擲筆することとする。

(弘前大学人文学部助教授)